



だんだん動物園入場システム V03

価値と品質リスクから、 実行するテストを選ぶ

構造変化から必要な要求を導き、品質リスクに応じてテストの配置・厚み・ケースを決める



目次

価値から要求へ、リスクから実行可能なテストアーキテクチャへ。

01 チーム紹介

02 問題提起

03 設計方針

04 アーキテクチャ

05 詳細設計

06 結果



01 チーム紹介

部門・拠点を越えて集まった8人



チーム紹介とコンセプト | プロダクトに愛を、テストにAIを。



主メンバー 5名／サポート 3名
東京・名古屋・大阪

最大の敵は、品質リスクでもAIでもなく
「そこに時間はあるんか？」でした。



人間 — 深さ
プロダクトに愛を

仕様理解の“深さ”を追求する

- ・ プロダクトを理解する
- ・ 利用者と価値を理解する
- ・ 根拠を確かめる
- ・ 採否と優先度を判断する



AI — 広さ
テストにAIを

人間は“価値ある判断”に集中する

- ・ 要求、リスク、観点候補を広げる
- ・ 複数の切り口を返す
- ・ 判断漏れをレビューする

深さは人間が、広さはAIが担う。
品質は、その両輪で設計する。

02 問題提起

AIでどこまでテスト設計ができるのか



問題提起 | AIで、どこまでテスト設計ができるのか

AIだけでは、候補は増やせても、テストの根拠は決められない

仕様の壁

仕様に書かれた機能だけでは、構造変更後に必要な振る舞いを決められない。

判断の壁

要求・リスク候補は増やせても、誰のどの価値を守るか、優先度を自動では決められない。

選定の壁

組合せは作れても、どのケースを残し、どれを除外するか説明できない。

課題：価値と品質リスクを根拠に、実行するテストをどう選ぶか

03 設計方針

深く定義し、広く探索し、人が決める



アプローチ | 深く定義し、広く探索し、人が決める

AIを設計主体にせず、人間の判断を強くする工程へ組み込む。

人間

1 | 深く定義

価値・文脈・制約・判断基準
を定義

AI

2 | 広く探索

要求・リスク・観点・組合せ
候補を発散

人間

3 | 根拠で判断

採否・優先度・レベル・厚み
を決定

AI出力を直接採用せず、判断と理由を成果物へ残す。

価値と品質リスクからテストを選ぶための4つの工夫

構造変化から要求と品質リスクを導き、テストアーキテクチャへつなぐための4つの工夫

01

構造変化から必要な要求を導く

仕様の記述だけでなく、構造変化から必要なシステムの振る舞いを導き出した。

03

要求トレーサビリティによる確認事項の抽出

要求からテスト要求までを追跡し、明記された仕様だけでは決められない項目を確認事項として分離管理した。

02

影響度判断の妥当性確認

心の声の変化量は補助指標。運用継続性や代替手段を含めて、品質リスクの影響度を人が最終判断する。

04

探索と判断を分担する

AIで候補を広げ、人が関連性・代表性・根拠に基づいて採否を決める。

4つの工夫で得た要求・リスク・根拠を、5軸のテストアーキテクチャへ渡す

工夫01 構造変化から必要な要求を導く

仕様の記述だけでなく、構造変化から必要なシステムの振る舞いを導き出した。

人数制限

30人 → 60人
固定 → 0~999人
境界・設定変更直後

ゲート増設

1台 → 3台
並行処理・競合
ゲート間整合性

判定責務の集約

各ゲート → ハブ
責務移動・集中
障害時の振る舞い

ゲート増設

×
判定のハブ集約
×

同時処理

↓
重複入場
状態不整合
単一障害点

重点保証

- ・ 排他制御
- ・ ゲート間整合性
- ・ 障害・復旧
- ・ 同時処理性能

4.3 導出根拠（全件）

導出したシステム要求は以下のとおりである。

ID	システム要求	提供機能	V03変更点			採否	判定理由	出典
			(1)	(2)	(3)			
SR-01	Web・発券機で時間枠を指定して予約・購入できること	時間枠指定の予約・購入機能	B	—	—	採用(確定)	予約機能は変更なし 人数上限が販売枠に影響	No.6/No.2
SR-02	各時間枠の販売可能枠(残数)を算出・表示できること	残数算出・表示	B	—	—	採用(確定)	上限変更で残数計算に影響	No.6
SR-03	購入完了した時間枠を確保し、同一枠を重複販売しないこと	枠確保・排他制御	B	—	—	採用(確定)	排他は既存だが、 人数制御の影響あり	No.6
SR-04	予約処理の二重送信・重複購入を防止できること	二重送信防止	—	—	—	採用(導出)	既存・変更なし	No.6要確認
SR-05	予約・購入結果を利用者に明確に提示できること	結果提示機能	—	—	—	採用(確定)	既存UI	No.7
SR-06	予約済みチケット・QRを来園前に再確認できること	予約再確認機能	—	—	—	採用(導出)	既存・要確認	No.6要確認
SR-07	予約枠に対応する有効なQRを取得・保持できること	QR発行・保持	—	—	B	採用(確定)	配信先がハブへ変更の影響	No.9
SR-08	発行済みQRを速やかに表示・読取できること	QR表示・読取	—	B	—	採用(確定)	ゲート増設で読取端末増	No.8/No.4
SR-09	有効なQRを確実に読取・認証できること	QR読取・認証	—	B	B	採用(確定)	読取は既存、構成変更の影響	No.4/No.9
SR-10	読取失敗・通信不良時に再試行・エラー通知できること	再試行/エラー通知	—	B	B	採用(導出)	要確認。通信経路変更の影響	No.9要確認
SR-11	有効なQRを入場可と正しく判定できること	入場可否判定	—	—	B	採用(確定)	判定主体の変更 ゲート→ハブ(変更3中核)	No.9
SR-12	無効・期限切れQRを入場不可と判定できること	無効判定	—	—	B	採用(確定)	ハブ判定	No.9
SR-13	使用済みQRの再利用を拒否できること	使用済み判定	—	—	B	採用(確定)	ハブでの状態一元管理が新規	No.9
SR-14	複数ゲートへ同時提示された同一QRを1回のみ入場可とすること	重複入場防止(排他)	—	—	A	採用(導出)	ゲート増設+ハブ集約で新規に必要	No.9(構造上の見解)
SR-15	予約時間枠内であることを判定し入場を許可できること	時間枠判定	—	—	B	採用(確定)	判定ロジックは既存、ハブへ移行	No.8
SR-16	予約時間枠外のQRを仕様どおりに扱えること	枠外判定	—	—	B	採用(確定)	同上	No.8
SR-17	認証結果を該当ゲートへ正しく通知できること	判定結果通知	—	—	A	採用(確定)	ハブ→ゲート通知はV03新規	No.9
SR-18	認証成功時に確実に入場処理(扉制御含む)を完了できること	入場処理完了	—	B	—	採用(確定)	扉制御は既存、ハブ通知受け動作	No.4
SR-19	認証～判定～通知～扉制御を所定時間内に完了できること	認証～通過処理	—	B	A	採用(導出)	ハブ経由の処理フローが新規	No.1/No.9

仕様に明記されていないため、仕様ではなく「導出した要求」として根拠を残した。

工夫02 影響度判断の妥当性確認

心の声の変化量は補助指標。運用継続性や代替手段を含めて、品質リスクの影響度を人が最終判断する。

影響度の妥当性評価の考え方

- 1

期待状態

+3 | 安心・信頼 😊
- 2

価値毀損時

-3 | 失望・不安 😞
- 3

変化量

6 | 毀損の深さを可視化
- 最終判断：時間・範囲・代替
- スコアは影響度を直接決めない

3.1 結果概要

成果物2_001 6.4 に示す品質リスク20件について、影響を受けるステークホルダー要求ごとに評価単位を設定し、計36件を評価した。影響度の内訳は、大27件、中6件、小3件である。

評価結果のまとめは、下表のとおり。

判定結果	評価単位件数	品質リスク数	該当箇所	対応
妥当	30件	16件		成果物2_001 6.4 の判定を維持する
要見直し	3件	2件	RSK-17 (小→大) RSK-18 (小→中)	成果物2_001 6.4 および成果物1 2.6 を改訂する
暫定	3件	2件	RSK-05 (小) RSK-16 (中)	成果物2_001 6.7 の確認事項として、 依頼者と合意後に確定する
合計	36件	20件		

※評価単位件数と品質リスク数が一致しないのは、RSK-16およびRSK-18が複数のビジネス要求に対して評価単位を持つためである。

3.2.2 BR-02 変化に強く、持続的に運営できる動物園にしたい

設定変更の未反映、ゲート間の運用品質のばらつき、長時間稼働時の性能劣化および既存機能の劣化は、変化に対応しながら持続的に運営するために必要なステークホルダー価値を直接損なう。

ただし毀損の程度は事象により異なり、運営条件の変更が販売・入場制御に反映されない事象は人数制御の前提を崩すため影響度「大」、運用回避が可能ならば「小」と判定した。

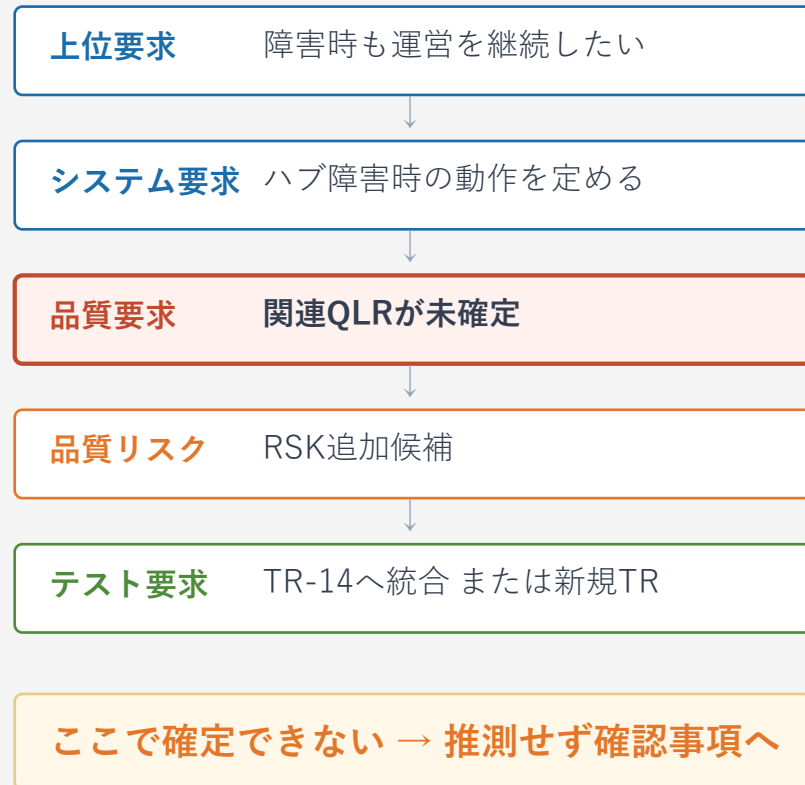
ID	品質リスク	ステークホルダー	ステークホルダー要求	心の声および感情スコアの変化（上段：期待値、下段：価値毀損時）			変化量	象限	影響度	影響度の妥当性評価	
RSK-01	入場上限値が正しく反映されない	システム運用担当者	入場者数上限を変更したい	入場者数上限を柔軟に変更したい	安心・信頼	😊	3	Δ 7	②	大	上限値が制衡へ反映されず需要変動へ追従できないため、変化に対応した運営というビジネス要求の達成が困難となり、影響度「大」は妥当。感情の変化量7も同水準の毀損を示し、本判定を裏づける。
RSK-01	入場上限値が正しく反映されない	システム運用担当者	入場者数上限を変更したい	設定変更が反映されないのは困る	怒り・不信	😡	-4				
RSK-02	変更内容が即時反映されない	システム運用担当者	時間帯別販売枠を変更したい	変更内容が正しく反映されてほしい	安心・信頼	😊	3	Δ 7	②	大	
RSK-02	変更内容が即時反映されない	システム運用担当者	時間帯別販売枠を変更したい	設定変更が反映されないのは困る	怒り・不信	😡	-4				
RSK-16	QR判定処理に失敗する	システム運用担当者	入場サービスを迅速に復旧したい	障害発生時は迅速に復旧したい	安心・信頼	😊	3	Δ 8	②	中	入場不能は復旧により解消され、持続的な運営というビジネス要求の達成は阻害されないため、影響度「中」は妥当。感情の変化量8は運用担当者個人が受ける毀損の深さを表すものであり、毀損が持続しない「時間」の観点から本判定と矛盾しない。ただし本判定は短時間で復旧することを前提とするため、復旧時間を成果物2_001 6.7の確認事項とする。
RSK-16	QR判定処理に失敗する	システム運用担当者	入場サービスを迅速に復旧したい	入場不能状態が続くのは避けたい	強い怒り・裏切り・	😡	-5				
RSK-17	システム性能が劣化する	システム運用担当者	利用者増加時でも安定運用したい	人気時間帯でも安定して動いてほしい	安心・信頼	😊	3	Δ 6	④	小→大	【要見直し：小→大】長時間連続稼働時の性能劣化は応答遅延と滞留を招き、密回避を前提とする安全・安心な運営というビジネス要求の達成が困難となる。成果物2_001 6.4 の判定「小」は、6.3.2 の「小」の要件である運用回避による吸収に該当しないため、「大」への見直しを要する。感情の変化量6は運用担当者個人が受ける毀損の深さを表すものであり、来園者への波及を含む事業影響とは測定対象が異なるため、本判定と矛盾しない。
RSK-17	システム性能が劣化する	システム運用担当者	利用者増加時でも安定運用したい	性能低下による滞留を発生させたくない	失望・不安	😞	-3				
RSK-18	予約処理能力が不足する	システム運用担当者	アクセス集中時も安定運用したい	アクセス集中でもサービスを止めたくない	安心・信頼	😊	3				【要見直し：小→中】予約不能はアクセス集中時に限定されるが、当該時間帯では持続的な運営が一部阻害

感情スコアと運用影響を突合し、影響度の過大・過小評価を防いだ。

工夫03 要求トレーサビリティによる確認事項の抽出

要求からテスト要求までを追跡し、明記された仕様だけでは決められない項目を確認事項として分離管理した。

要求のつながりを追跡



実成果物 | 確認事項 No.8：ハブ障害時のゲート動作・縮退・停止・復旧後整合性

No.	確認事項	関連TR	関連QLR・RSK	取扱い
1	認証開始から扉制御完了までの目標応答時間	TR-06	QLR-14、RSK-15	合意後に性能条件および期待結果へ反映する
2	3ゲート同時利用時の想定処理件数またはスレーブット	TR-06	QLR-05、QLR-09、RSK-07、RSK-15	想定ピーク条件および負荷モデルを合意する
3	ピーク時・負荷偏在時の許容応答時間および許容エラー率	TR-06、TR-09、TR-16	QLR-09、QLR-14、RSK-07、RSK-10、	性能テストの可否判定基準として管理する
4	長時間稼働とみなす継続時間	TR-15	QLR-15、RSK-17	運用時間または依頼者要求から決定する
5	長時間稼働前後で許容する性能劣化率	TR-15	QLR-15、RSK-17	測定方法および比較基準を合意する
6	入場実績と実際の処理結果の照合単位および許容差	TR-03、TR-07	QLR-07、QLR-18、RSK-04、RSK-08	入場単位または時間枠単位などの照合基準を定める
7	通信異常時の再試行回数、タイムアウト、再送および二重処理防止仕様	TR-12、TR-14	QLR-10、QLR-13、RSK-13、RSK-16	期待動作確定後に異常系テスト条件へ展開する
8	入場ゲートハブ障害時のゲート動作・縮退・停止および復旧後整合性	TR-14または新規TR候補	関連QLR未確定、RSK追加候補	仕様確認後に既存TRへ統合するか、新規TRを追加する
9	上限値を販売済み枚数より小さい値へ変更した場合の期待動作	TR-01	QLR-01、QLR-02、RSK-01、RSK-02	設定可否、反映時点および既存予約の扱いを合意する
10	使用済みQR状態を確定する処理時点	TR-05、TR-11	QLR-06、QLR-12、RSK-06、RSK-12	判定時、通知時、扉開放時または通過完了時のいずれかを明確化する
11	ハブ障害時のゲート動作・縮退・停止・復旧後整合性	TR-19	QLR-19候補、RSK-21	仕様確認後にTR-19を確定

関連QLR未確定 → 仕様確認後にTRを確定

未確定11件を抽出し、推測で補完せず、依頼元との合意後に要求・リスク・テスト要求へ反映する。

工夫04 探索と判断を分担する

AIで候補を広げ、人が根拠に基づいて採否を決める

AI

家族連れ

就学旅行生

高齢者

カップル

近隣リピーター

遠方観光客

人気動物ファン

外国人観光客

人間

選定基準

同行形態

V03変更関連

操作条件

要求の代表性

利用頻度

システムとの関連

利用時間帯

2.1.3 選定結果

上記基準に基づき、来園者ペルソナを選定した。選定結果を以下の表に示す。

なお、採用・除外の判断は、

- ・V03変更との関連性
 - ・入場システムへの影響度
 - ・期待価値および懸念事項の代表性
 - ・他ペルソナとの重複有無
- を基準として実施した。

ID	ペルソナ	属性・特徴	利用サイクル	選定理由	判定
P1	家族連れ	30代後半の保護者、幼児同伴（複数人で利用）	土日・祝日、長期休暇に来園	動物園の主要利用者層。混雑や待ち時間の影響を受けやすく、複数人入場の代表ケースとなる	採用
P2	高齢者	60代以上、スマホ操作に不慣れ、長時間待機が負担（単数利用）	平日昼間中心	利便性・案内性・待機負荷への配慮を代表できる	採用
P3	近隣リピーター会員	再開発マンション住民、平日に頻繁利用（単数利用）	平日午後に定期利用（月数回～週1回程度）	V03で増加が想定される利用者。継続利用価値を代表できる	採用
P4	人気動物ファン	開園直後を狙う熱心な利用者（単数利用）	イベント日・新展示開始日・休日朝に集中	V03の時間帯予約や予約競争の影響を最も受けるため	採用
P5	修学旅行生	団体行動、自由時間利用（複数人で利用）	学校行事時期	団体利用が中心であり、V03変更点との関連が小さい	除外
P6	カップル	20代、デート利用（複数人で利用）	休日中心	「待ちたくない」「スムーズに入園したい」は家族連れで代表可能	除外
P7	遠方観光客	他県から来園、車利用（複数人で利用）	長期休暇・連休	主な関心が交通・駐車場であり入場システムとの関連が薄い	除外
P8	外国人観光客	日本語が不得意（複数人で利用）	観光シーズン	今回の前提が「日本語のみ」のため分析対象外	除外

AI出力を直接採用せず、採用・除外理由を記録しながら代表ペルソナへ収束させた。

4つの工夫で得た要求・リスク・根拠を、5軸のテストアーキテクチャへ渡す

構造変化から要求と品質リスクを導き、要求・リスク・根拠を、テストの配置・厚み・ケースへ変換する

01

構造変化から必要な要求を導く

発生個所・条件

02

影響度判断の妥当性確認

影響度・優先度

03

要求トレーサビリティによる確認事項の抽出

根拠・未確定事項

04

探索と判断を分担する

観点候補・採否理由



何を守る

どこで見る

どう見る

いつ見る

どこまで見る

04 テストアーキテクチャ

5つの軸でテストの全体像を設計する



テストアーキテクチャは5つの軸で設計した

要求とリスクを、実行可能な品質保証活動へ変換する。

何を守る



品質特性（7つの重点保証領域）

どこで見る



テストレベル（IT / ST）

どう見る



テストタイプ（機能・信頼性・性能）

いつ見る



テストサイクル（4つのサイクル）

どこまで見る



テスト戦略（P1 / P2 / P3 の厚み）

5軸をテストマップ（機能×観点）・テスト明細（テスト条件／確認内容）・テストケースへ継承

何を守るか | 7つの重点保証領域

機能一覧ではなく、価値を阻むリスクのまとまりで保証対象を構造化する。

01 不正入場防止

02 入場判定の整合性

03 定員管理の正確性

04 複数ゲートの同時処理

05 ハブ障害時の運営継続

06 性能・負荷耐性

07 既存業務の回帰

ここを起点に、レベル・タイプ・サイクル・厚みを割り当てる。

どこで・どう見るか | レベルとタイプを分ける

リスクの発生箇所、観測範囲、品質特性から配置を決める。

IT | 結合レベル

ゲート・ハブ間I/F
状態更新の連携
通信異常・復旧
単体では見えない相互作用

ST | システムレベル

予約から入場まで
複数ゲート同時処理
定員・状態・判定整合
運営継続

テストタイプ

機能：判定・状態・業務
信頼性：障害・復旧・継続
性能：同時処理・負荷・応答

単一コンポーネントの成立性と、複数コンポーネント間の品質保証を混在させない。

3.4.3 テストタイプとテストレベルの対応

No	テストタイプ	IT	ST	対応理由
1	機能テスト	○	○	個別連携の正確性と、システム全体としての業務成立性の両方を確認するため
2	信頼性テスト	○	○	状態同期・通信異常は結合レベル、長時間稼働・業務継続性はシステムレベルで確認するため
3	性能テスト	—	○	実運用に近い構成、および負荷条件で評価する必要があるため
4	ユーザビリティテスト	—	○	利用者・運用者が実際に利用する一連の入場処理を対象とするため
5	リグレッションテスト	※	○	既存業務・既存機能への影響をシステム全体で確認するため

※必要に応じて実施

結合テストでは、コンポーネント間の情報伝達および状態更新を直接確認し、不具合の発生箇所を特定できる粒度でテストする。

システムテストでは、結合確認済みのコンポーネントを使用し、利用者・運用者の視点から業務全体の成立性および品質要求の達成状況を確認する。

いつ見るか | 目的の異なる4サイクル

同じ観点の重複ではなく、サイクルごとに答える問いを変える。

C1

V03変更点

変更機能・構成

C2

業務シナリオ

予約から入場

C3

性能・信頼性

負荷・障害・回復

C4

リグレッション

既存品質の維持

連携・整合性 → 業務成立性 → 運用品質 → 変更影響 の順で段階的に確認

3.5.2 テストサイクル

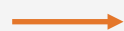
品質リスクを低減しながら確認結果を積み上げるため、以下の4つのテストサイクルを設定した。

テストサイクル	目的	テストレベル		主なテストタイプ
		IT	ST	
サイクル1 連携・整合性確認	V03の構成変更に伴うコンポーネント間の品質リスクを早期に検出する	○	—	機能テスト 信頼性テスト
サイクル2 業務成立性確認	システム全体として主要業務が成立することを確認する	—	○	機能テスト 信頼性テスト
サイクル3 運用品質確認	実運用に近い条件下で必要な処理性能、安定性および利用性を確認する	—	○	性能テスト 信頼性テスト ユーザビリティテスト
サイクル4 変更影響確認	V03変更による既存機能および既存業務への影響を確認する	—	○	機能テスト 信頼性テスト リグレッションテスト

どこまで見るか | 優先度をテストの厚みへ変換

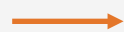
P1・P2・P3を表示で終わらせず、後工程の資源配分へ渡す。

P1 | 重点



境界・競合・状態遷移・異常・復旧を厚く展開

P2 | 標準



代表条件と主要な相互作用を確認

P3 | 限定



変更影響と基本成立性に絞る

高リスクへ資源を寄せ、
低リスクは成立性確認へ限定する。

3.6.2 優先度別のテスト設計方針

優先度	厚み	条件値	組合せ	状態・タイミング	異常・復旧	シナリオ・変更影響
P1	重点	境界値、内点、外点 (※)を確認	重要な因子を複合して 確認	遷移前後、同時実行、タイミ ング競合を確認	通信断、遅延、再送、 二重処理、復旧を確認	主要シナリオ、障害シナリ オ、直接・波及影響を確認
P2	標準	代表値および主要境界 を確認	主要条件の代表的な組 合せを確認	主要な状態遷移を確認	代表的な異常条件を確 認	代表シナリオおよび直接影響 を確認
P3	限定	代表値を確認	原則として単一条件ま たは代表組合せを確認	必要な状態のみ確認	リスク根拠がある場合 に限定して確認	代表的なシナリオを確認

※内点 = 有効同値クラスの代表値、外点 = 無効同値クラスの代表値

05 詳細設計

リスクを実行可能なテストへ変換する



品質リスクを設計要素へ変換する規則

「リスクから導いたテスト」であることを、対応関係で説明する。



迷いどころを個人の勘に残さず、**変換規則**として再現可能にする。

価値からケースまでのつながり | 重複入場リスクを例に

価値からケースまで、なぜ必要かを一本の線で説明する。

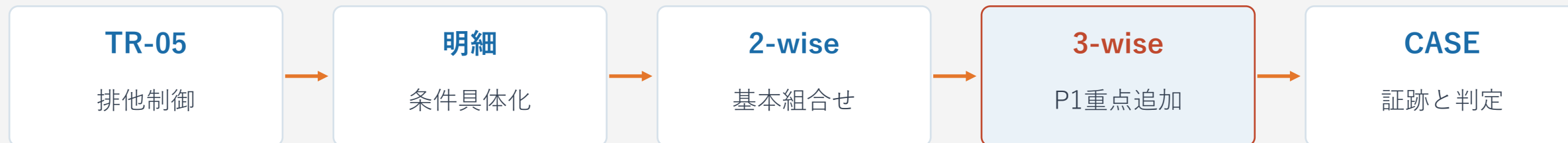


要求トレーサビリティの例

	ビジネス要求 (BR)	ステークホルダー要求 (SHR)	システム要求 (SR)	品質要求 (QLR)	品質リスク (RSK)	テスト要求 (TR)
①	BR-01 安全・安心な運営	SHR-243 不正入場や誤入場を防止したい	SR-14 同一QRの複数ゲート同時提示を1回のみ入場可とすること	QLR-06 QRの使用済み状態が正しく管理されること	RSK-06 使用済み判定が競合する	TR-05 同一QRによる重複入場を防止できること

P1リスクを、実行して判定できる組合せへ

2-wiseを土台に、競合・状態・タイミングを重点追加する。



実機能への着地 主TR-05（排他制御）→ 明細 V03-093～099（7件・全P1／重点）→ 71ケース C1-TC-0532～0602 + E2E集約 SC-17-01～05（V03-099-C2）

重点条件

同一QR × 複数ゲート × 同時／直後
× 状態更新 × 通信・復旧

判定に必要な証跡

機器ID・QR識別子・要求・応答・処理時刻
状態更新結果を相関

ケース数ではなく、P1リスクを判定できる条件と証跡を厚くする。

テストケースは「なぜ残したか」で選定する

網羅数の競争ではなく、2段階選定（結合レベル成立→厚み選定）で採用・除外する。



段階1＝結合テストレベルとして成立するかで採用／除外、段階2＝P1/P2/P3の厚み（P1=11・P2=5・P3=4件/明細）で件数を配分。

残す（採用）の判断軸

- 複数機器・システム連携で成立する確認
- 競合・状態遷移・タイミング・復旧の重点
- P1/P2の高リスク組合せ（厚み配分で補完）
- E2E業務シナリオの成立性（SC-17-01~05）
- 可否を判定できる証拠を取得できる

除外・別工程へ移す判断軸

- 単一画面内の文言・アイコン単独の確認
- 単一機器内で完結し連携が明示できない確認
- 同一リスクを同一条件で重複確認
- 変更影響と無関係な詳細組合せ
- 判定基準が未確定（観測のみ）／下位で保証可能

要求・リスク・レベル・タイプ・サイクル・厚みで、
最終855ケース+5シナリオを選定し、品質を確保する。

06 結果

設計したのは、判断の流れ



その結果 | テストの選定理由を説明できるアーキテクチャ

重要視した3点が、成果物の構造とケース選定に反映された。

01

価値起点

要求とテストを上位価値まで遡れる。

「何を」だけでなく「なぜ必要か」を説明できる。

02

構造変化起点

人数制限、ゲート増設、判定責務の集約から必要な要求を導き、重複入場、状態不整合、単一障害点をテスト対象化した。

03

説明可能性

テストアーキテクチャの5つ軸を、テストマップ、テスト明細、テストケースへ継承した。

採用・除外・厚み配分の理由を説明できる。

価値と品質リスクから、「なぜこのテストを実行するのか」を説明できるようにした。

結論 | 価値と品質リスクから、実行するテストを選ぶ

AI活用ではなく、価値とリスクに基づくテスト設計が主役。

価値から要求を導き、
構造変化からリスクを見つけ、
リスクから実行可能なテストへ変換した。

AIは、その判断を支えるための手段。

プロダクトに愛を、テストにAIを。